

近年の台湾の図書館事情

山田 美雪
(兵庫県立大学)

The Modern Libraries in the Republic of China (Taiwan)

By Miyuki YAMADA
(University of Hyogo)

Abstract

This paper considers the libraries in Taiwan (the Republic of China). I was able to visit some libraries representing Taiwan, “National Taiwan University Library, National Taiwan Normal University Library, Taipei Public Library, Ximen Intelligent Library, Longan ‘including Longan Stack’ Branch Library at Daan District, Beitou Branch Library” in July 2019. I consider the library situation of Taiwan based on the knowledge acquired through this visit, and compare with the library situation of Japan.

1 はじめに

I-LISS (International Library and Information Science Society) 1) は、15 の国別支部とグローバル支部に属する世界の図書館情報学の関係者達から構成される国際学会である。その研究大会が、2019 年 7 月 11-13 日に国立台湾師範大学 (台湾 台北市) において、2019 International Conference on Library and Information Science (ICLIS) in Taipei として開催された 2)。その際にオプショナルツアー等などを利用して、台湾を代表する図書館をいくつか見学したので、その様子を今回報告する。なお、今回はあくまで学会参加がメインであり、前回の研究大会時より滞在日程が短かったため、オプショナルツアー以外は事前にアポイントメントを取らず、その都度調整しながら訪問先を決めて訪

れた。そのため、内容的にはあまり深い所まで踏み込めていない点もあるがご容赦いただきたい。なお、台湾の正式名称は中華民国 (Republic of China) であるが、本稿では「台湾」と表記する。

(日程)

- 7 月 11 日 国立台湾大学図書館 (オプショナルツアー)
- 7 月 12-13 日 2019 International Conference on Library and Information Science (ICLIS) in Taipei (国立台湾師範大学)
- 7 月 13 日 国立台湾師範大学図書館
- 7 月 13-14 日 台北市立図書館 (西門知恵図書館, 龍安民衆閱覽室, 中央館, 北投分館)

2 國立臺灣大學圖書館 (国立台湾大学図書館)

大学の公式ホームページによると、国立台湾大学 (National Taiwan University) は、日本統治時代の 1928 年に 7 番目の帝国大学、台北帝国大学 (臺北帝國大學) として設立され、第二次世界大戦終結後の 1945 年に現在の名前に変更された³⁾。現在 11 学院 (学部及び研究科)・54 学系 (学科)・96 研究所 (専攻)・33 研究中心 (研究所) と夜間部を擁し、1 万人を越える学生が通うマンモス校で、各キャンパス・研究所等の総面積の合計は台湾全体の 1 割に相当すると言われている。台湾のトップ大学であり、現在の第 14 代総統、蔡英文 (ツァイ・インウェン) 氏など多くの著名人を輩出している。

総図書館 (中央館) は大学本部がある台北のメインキャンパスに位置する。キャンパス内は正門から高い椰子の並木 (大王椰子) が並び、その奥に総図書館 (中央図書館) がある (図 1)。敷地が広大なため、移動には自転車や車が使われている。図書館は当初別の場所にあったが、1998 年に現在の場所に移設され、旧館は校史館 (博物館) として公開されている。



図 1 総館 (中央館)

移設の際、各部局の図書室等にあった蔵書を

集約して纏めたので、分室・分館数はかなり減ったとのことであった。日本国内の旧帝大図書館は各部局ごとに蔵書が分散しているので、この点は利用者にとっては使いやすいのではないかと思った。

なお、日本でも 2014 年に伊藤豊雄氏が手がけて開館した社会科学院 (社会科学部) の新図書館が 2017 年の図書館総合展で発表され、話題になったことは記憶に新しい⁴⁾。

各フロアの構成は下記のようにになっている⁵⁾。

- B1F 自習室 (2 部屋あり、どちらもかなり広い。24 時間利用可能)、コピーセンター、談話室
- 1F 閲覧室、書庫出納カウンター (自動書庫からの出納を行う)、予約図書コーナー、雑誌、新聞、インフォメーションサービス、四庫全書、東アジア古典文化コレクション
- 2F 集密書架、人文・社会科学モノグラフコレクション、美術、音楽、談話室、自習キャレル
- 3F 国立台湾大学のコレクション、製本雑誌、談話室、自習キャレル
- 4F マルチメディアセンター、科学技術とレファレンスコレクション、モノグラフ、社会科学の西欧論文、地図、自習キャレル
- 5F 常設展、台湾研究のコレクション、先住民に関するコレクション、糸綴じ製本、地域研究コレクション、貴重書 (*5F はオンラインツアーを HP 上で公開している) <<http://cvweb.lib.ntu.edu.tw/main/specialcol/index.html>>

見学ポイントとして、自動書庫と特殊コレクション、メディアセンターに重点を置いて説明がなされた。旧帝大時代からの日本語資料も多

く所蔵されているのだが、学会のオプションツアー（図 2）で色々な国から多くの人が参加しており、タイトなスケジュールの中で各国参加者から様々な質問が飛び交い、個別に詳細な質問をする時間はあまりなかったため、残念ながら日本語資料だけに限った詳しい説明を聞くことは出来なかった。



図 2 図書館見学ツアー

自動書庫は日本ファイリング社製で平成 30 年にスタックークレーン 4 台を 2 箇所を導入（図 3, 4, 5）。台湾の大学では第一号である。128 万冊収容できるとのことだが、現時点では 70 万冊収容されている。地震が多い国なので、非常設備などには注意を払ったつくりになっているとのことだった。自動書庫は、移転から 20 年が経ち、スペースが飽和状態になろうとしているため、その解決策のひとつとして導入された。2017 年の図書館総合展では、「総合図書館は、アクティブ・ラーニング及び ICT 時代の新しいサービスと将来への発展の必要性を満たすべく、スペース改造研究プロジェクトを展開しており、これは恐らく台湾で最大の図書館内装改造計画となる。」という報告がされており 6）、この自動書庫の導入もその一環であろう。



図 3 自動書庫の部屋



図 4 自動書庫取り出し口

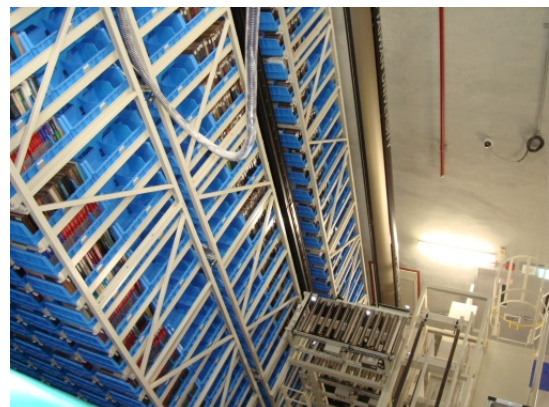


図 5 自動書庫内部

分類についてスタッフに聞くと、1950 年くらいまでは UDC (Universal Decimal Classification; 国際十進分類法) を使用していたようだ

が、今は基本 DC (Decimal Classification; 十進分類法) をベースにしたものを採用 (図 6, 7)。但し、博論など一部 LCC (Library of Congress Classification; 米国議会図書館分類法) を入れているとのことだった。LCC を導入している大学図書館は珍しいので理由を聞くと「基本的に研究者は米国留学経験者が多いので、米国のやり方を取り入れたのではないか」という回答であったが、はっきりしたことはわからないとのことだった。ディスカバリーサービスは Primo (Ex Libris 社) である。台湾は国立台湾師範大学をはじめ Primo の導入率が高いようである 7)。



図 6 学位論文 (製本)



図 7 背ラベル

3F 奥には、「台大人文庫」という特殊コレクションの部屋がある (図 8)。台湾知識人の西洋

風書齋を思わせる風情があり、台湾を代表する著名作家の書籍やそれらに関する研究書が、ずらりと並べられた特別な部屋である 8)。入口両側にはソファが置かれ、壁や棚は落ち着いた色合いの木目調で統一され、美しい弧を描く螺旋階段を上りながら高い天井に向かう間も、貴重な書物が並べられた書架が目飛び込んでくる (図 9)。窓からは緑豊かなキャンパスの風景が広がり、さりげなくしかし非常に凝った造りの椅子や棚が絶妙に配置されている。あたかも映画のワンシーンに出てくるような、特別な美しい空間が広がっているのである。館内閲覧に限定された人文庫内の書籍には、貴重書も少なくなく (図 10)、ただ書棚を眺めているだけでも、幸せな時間を過ごすことができる。



図 8 台大人文庫入口



図 9 台大人文庫入内部



図 10 台大人文庫蔵書

また館内には以下のような日本書籍が貴重書として所蔵されており 9), 一部は 5F の常設展のガラスケース内に展示されていた。

- 1900 年以前の日本資料・古典籍
(古典籍は、江戸期の和本を中心に約 2 万冊が所蔵されている。)
- 1945 年以前の台湾に関する歴史資料
- 日本の南方政策に関する資料 (日本統治時代に当時の日本が南進政策をどのように進めようとしていたか、台湾・台北帝国大学をそのための拠点としてどのように位置づけていたか等を示すもの)
- 『日本書紀』 (1442 年古写本)

3 國立臺灣師範大學圖書館 (国立台湾師範大学図書館)

国立台湾師範大学 (National Taiwan Normal University) は、台湾の国立大学で創立は 1946 年だが、日本植民統治時代、同地には主に帝国大学へ進学する学生が学ぶ旧制台北高等学校 (1922 年《大正 11 年》創立) があり、第 8-9 代総統の李登輝らが学んだ。略称は師大 10)。

3 キャンパスに学生数は 12,175 人 (うち学部生 7,267 人、大学院生 4,908 人、留学生 3,000

人) 教員数は約 1,980 人。1956 年に開設された Mandarin Training Center (国語教学センター) は中国語を第二外国語として学習できる台湾で最大のセンターとなっている 11)。

図書館のマスコットキャラクターはライオンである。館内のみならず周辺にも、像やイラストがあちこちあった (図 12)。訪問したのが土曜日午後であったため、1F のショップは休みであった。また、夏休み中ということもあり、図書館内はそれほど人はいなかった。(台湾は欧米と同じく学期が 9 月開始、6 月終了である。)



図 11 図書館外観



図 12 マスコットのライオン

建物は円筒状で中が吹き抜けになっており、周囲の壁に沿って書架や閲覧机が配置され (図 13), 建物内の相当部分が吹き抜けになっている,

というかなり空間を贅沢に使った構造になっている。そのため、ラーニングコモンズエリア(図14)もそれほど広くはない。使っている什器類はラーニングコモンズや視聴覚コーナーは日本のそれと変わらないが、それ以外は木製をベースにした昔の日本の図書館でよく見られたものであった。また、館内のいたる所に給水器が設置され、水とお湯の両方が出るようになっていた(図15)。

一番驚いたのが、通路の隅にうず高く本が山のように積まれているスポットがいくつもあり、なんの標識もなかったことである(図16)。おそらく除籍対象の資料と思われるが、バックヤードに本来入れるべきモノを、閲覧室内の通路に堂々と置いているのに、利用者から苦情は来ないのか?とも思った。日本の図書館では地震で書架が倒壊でもしないかぎり、このような光景はまず見られないであろう。



図14 ラーニングコモンズ



図13 閲覧機と椅子



図15 閲覧室



図 16 山積みになっている本

書架の本の並べ方も、綺麗に整理整頓されているところとそうでないところが結構あった。これは利用が多い・少ないとかではなく、綺麗好きできちんと並べないと気が済まない日本人とあまりこだわらない台湾人の国民性の違いからくるものかもしれない。

各階にはカウンターがあり、それぞれ 1-2 名程度スタッフが配置されていた。貸出・返却は自動貸出機で行う点は日本の大学図書館と同じである。

最上階は館長室、会議室、校史資料室といういわゆる事務エリアのため、訪問した日は土曜日で誰もいなかった。しかし、通常利用者エリアから館長室や会議室にストレートでいける動線を持っている図書館は、少なくとも日本ではあまり見かけない。立ち入り禁止の標識もロープもないというのも、文化の違いかもしれない。

4 西門智慧圖書館 (西門知恵図書館)

地下鉄西門駅の地下通路内にある市立図書館の分室 (図 17, 18)。2006 年、台北捷運 (台北地下鉄) との共同事業として作られた。面積は 60 坪で主に若者向けをターゲットにしている。蔵書は漫画 (図 19) が多い。無記名の悠遊卡 (後出) があれば、誰でも入館できる上、RFID 付き利用証により図書の貸出・返却を行うことのできる無人図書館 (図 20) というのが最大の特徴である。この図書館は台北市の財政難、図書館の人員増が困難という状況下での打開策として構想された。図書館を新たに建築するのではなく、設置場所などで民間の力を借りることにより経費を節減し、かつ無人化により人員不足を乗り切るという 2 つの側面がある (12)。開館は朝 6 時から夜 12 時迄で、地下鉄の運行時間に即した形になっている。



図 17 知恵図書館入り口



図 18 知恵図書館内部



図 20 自動貸出・返却装置



図 19 蔵書 (日本の漫画)

日本の公共図書館の類似例では、札幌市立図書館が札幌駅から大通りに向かう地下歩行通路に分室を設けているケースがある 13) が、あくまで貸出・返却を主として職員も常駐している出張型の図書室であるのに対し、こちらは最初から「無人で、利用層を若年層に絞った」という意味で異なる。また、日本でも無人の駅ナカ図書館はあるが、置かれている本はそれほど多くはない。図書館の蔵書として厳密なデータ管理や装備をしているわけではなく、貸出・返却も機械処理はせず、閲覧利用のみか、ノートに書いて貸出・返却処理するところも多いので、デジタル技術を駆使して完全無人化するところまではいっていないのが現状ではないと思われる。現在知恵図書館は 8 館あり、空港や公園など様々な場所に設置されている。

5 臺北市立圖書館 – 龍安民衆閱覽室 (台北市立図書館 龍安民衆閱覽室)

師大から徒歩 5 分程度のところにある台湾市立図書館の分館。雑居ビルの 2-3 階にあり (図 21, 22), 日本の公民館図書室に相当すると考えられる (図 23, 24)。カウンターの職員に英語で話しかけたが通じず, 英語がわかるスタッフとして紹介されたのが, 60 代のボランティアの女性であった。彼女は, 書架の細かい整理など, 日本ではボランティアがあまりタッチしないような業務をやっていたので, それも驚かされた。話をきくと, 中華電信 (日本の NTT に相当) を退職して時間が出来た。家の近所にこの図書館があるので, 職員が手薄な土日にボランティアスタッフとして来ているとのことだった。この後で訪れた中央図書館でも同じようなボランティアスタッフ達がいたので, 台湾では珍しいことではないのであろう。現在日本の図書館では, ボランティアのなり手がなかなか見つからないという話をよく聞く。年金事情等を考えると, 60 才を超えても元気なうちは働き続ける人が増えているからである。台湾は, 公的機関の年金事情が比較的良いため, 退職後はボランティアをする余裕がある人が多いのかもしれない。しかし, 台湾社会でも少子化は進んでおり, 既に合計特殊出生率は日本を下回っているため, 20 年後には状況は変わっているのかもしれない 14)。



図 21 図書館が入っている建物



図 22 図書館入口



図 23 新聞コーナー



図 24 ブックトラックと返却台

6 臺北市立圖書館－總館 (台北市立圖書館 中央館)

1930 年 (日本統治時代) に市内に 4 つの図書館が設置され、1952 年に合併して台北市立図書館が設置されたのが始まりで、1990 年に現在の建物に移設された (図 25)。台北市内に 50 余りの分館を有する台北市立図書館の本館で、専門書からマンガ雑誌やサブカルチャー雑誌まで、幅広い蔵書構成内容になっている。日本語の書籍も特に個別の棚に「日本語図書」などと分離されることなく (さすがに「日本文学」の棚には文学系書籍がまとまっているが)、一般書籍に混

ざって並べられており、この辺は大学図書館とも共通している。9F のフロアが多元文化資料コーナー (図 26) となっており、多言語資料の設置スペースとしてはかなり広い。新聞はマレー語、タイ語等 8 カ国語があり、これは台湾の最大都市の中央図書館であるから外国人の利用も多いと考えられる。HP に日本語表記があるが、海外の公共中央図書館では大変珍しい。なお、HP 上で次の 5 つのビジョンが日本語でも掲げられているが、1 から 3 は日本の公共図書館ではあまり見られない表記である 15)。

1. 標準化図書館

品質監査システム ISO9002 を拠り所にして、各拠点、各職員の利用者サービスの質を確実に統一化します。

2. オンライン図書館

電子資源の収集に努め、簡単で、敏速にデータが送信できるインターネットの特長を活用して、各利用者に 24 時間年中無休の情報サービスを提供します。

3. エコ化図書館

積極的にグリーン図書館を促進し、様々な資源を大切にして、万物共存の環境保護観念を確立します。

4. 国際化図書館

国外の図書館との姉妹館締結に力を入れて、提携関係を確立させます。経験と資源を共有して、積極的に先進的な図書館サービスと措置を取り入れて、当館のサービスレベルと品質の向上のための手本とします。

5. 人間本位の図書館

親しみと便利性を起点として、各サービスと設備を企画し、職員の作業に便利で、利用者に優しい図書館環境を提供します。



図 25 図書館外観

保できなかった事情もあるのだろうが、全体的に細長いビル一棟の構造になっている。地下 2F から 9F までが図書館、10,11F は会議室や学習センターとなっている。開館時間は火曜から土曜が 8:30-21:00、日曜・月曜は 9:00-17:00 である。休館日は毎月第一木曜及び台湾の祝祭日となっており、正月や盆の時期以外は、休館日は月 1-2 日程度となっている。

利用者カードは個人に配布されるものと、家族単位で配布されるもの(家族図書証)がある。貸し出しは個人の場合一人 15 冊、家族図書証は 30 冊迄で、30 日間借りられ、延長は 2 回迄出来る(一部除外あり)。視聴覚資料は 5 点、14 日間で延長は 2 回迄である。ただし雑誌は知恵図書館と中央館は貸し出しを行っていない。分館と民衆閲覧室ではバックナンバーは貸し出しが出来る。また、利用者カードは悠遊卡(easy card: 台湾で広く普及している交通系の IC カードで、交通機関やコンビニ等での買い物にも使える)にも付けられる。

入口ドアのそばには分類表(図 27)が貼付されており、カウンター周辺は中華圈らしいきらびやかなオブジェで飾られていた(図 28)。



図 26 多元文化コーナー この日は職員は不在

交通の便が良い街の中にあるため、面積が確



図 27 分類表



図 29 夜間返却口



図 28 カウンター周辺



図 30 いたるところにこのようなポスターがある

返却は閉館期間中はブックポスト (図 29) (但し視聴覚資料等一部除外あり) やコンビニでも可能 (但し有料) である。館内の至る所に QR コードと電子ブックの宣伝の張り紙があった (図 30) ので、電子ブックもかなり普及しているのではないかと考えられる。

7 臺北市立図書館 – 北投分館 (台北市立図書館 北投分館)

台北駅から MRT を乗り継いで約一時間。終点の新北投駅から徒歩約 7 分の北投公園内にある (図 31)。北投は温泉などで有名な観光地

(図 32) で、日本の加賀屋旅館なども進出している。この図書館の構想が持ち上がった 2000 年代の初頭、台湾では環境に対する市民の意識が高まったこともあり、台北市は「環境に優しい図書館を建設したい」という条件をコンペティションで提示した。その結果、エコ建築のパイオニアとして有名な九典聯合建築師事務所の設計が採用された。この設計では、①日本統治時代の木造家屋が多く残る北投の雰囲気伝える、②断絶している台湾の木造建築技術を取り戻す、の 2 つが考えられており、その結果、この図書館は次のような特徴をもつ 16)。

- 窓を広く取り、内部は外気を窓から取り込み空気の流れを意識した構造で、爽やかな風が通り抜ける。外気温があがると冷房に切り替えられる。
- テラス (図 33) の屋根は陽射しを遮る角度を計算して張り出し気味に設計されている。それにより、室内の温度が多少なりとも下げられている。屋上にはソーラーパネルと花壇が設置され、屋根の形状は雨水の貯留を意識してデザインされている。雨水は建物脇のろ過タンクを経て、地下の貯水槽に貯められ使用されている。南側の壁面の一部は常緑植物で覆われている。同事務所の郭代表によると、この建物の最大の特徴は、周りの木々、川、芝生と一体となっていることである。図書館のテラス席から外を眺めると、確かにその特徴がよく分かる (図 34)。



図 31 図書館外観



図 32 新北投駅のホーム



図 33 テラス席



図 34 東屋を見下ろす



図 35 書架は低めで空間の広がりを感じさせる

2006 年の開館以降、この図書館は国内のみならず、2014 年にはアメリカのテレビ放送局 CNN が選ぶ「世界で最も美しい図書館ベスト 27」にランクインする 17) など、世界的にも注目を集め、現在では観光名所の一つとなっている。

1 階は新聞や雑誌、DVD や CD の視聴覚コーナーがあり (図 35)、2 階は書籍、地下 1F は児童コーナーがあり、日本語や英語の児童書なども揃っている。隣には読み聞かせなどを行うホールがある。そして図書館のコンセプトに連動して、同館の蔵書は環境保護をテーマにしたものが多い。子どもや家族連れには居心地がよい反面、机や PC が使える席が少なめなので、ビジネスや学習にはやや不向きである。全体的には北欧風の温かみのある、非常にインスタ映えする図書館であるが、今回訪問したのが日曜の午後ということもあり、館内は超満員。エコであることは環境にはたしかによいのだが、人が多すぎてむし暑く、残念ながら「心地よさ」とはほど遠い「芋の子洗うがごとくの超満員で暑苦しさを感じる」状態であった。入口に入館者数を表示する電光掲示板があるのだが、その数値は共に示されている平均入館者数を遙かに超えた数値を示しており、カウンターには利用者の列が途切れることなく延々と続き、スタッフに質問するどころではなかった。

おそらく毎日多くの訪問者から色々質問を受けるため、スタッフ側の負担を減らすためであろう。館内入口には、観光客向け注意書きが中国語と英語でイラスト付きで大きく貼り出されており、それを読めば館内ルールがわかるようになっていた。そのルールによると、条件付きで館内撮影は出来るのだが、人があまりにも多すぎて、残念ながら今回良い写真はあまり撮れなかった。

また木材を使ったエコ建築自体は素晴らしいのだが、高温多湿な台湾の気候を考えると、耐久性に問題はないのかとも思った。事実、化粧室など水回り付近で湿気が多いところは木のドアにカビが生えていたり、蜘蛛の巣があちこちに張っているなど、今後の維持管理が大変ではないかと思われる箇所も見受けられた。

8 まとめ

台湾は、世界一の親日国で日本人が行きやすい国のひとつである。昔の日本の統治時代から発祥しているものも多く、親近感を覚えやすい。その一方、知恵図書館などデジタル技術を駆使して利用者のマナーの問題や、資料の紛失リスクを抱えながらも無人運営を行うといった日本にはない新しいタイプの図書館もあり、新鮮な

驚きを覚えた。

今回訪問して全体としては次のような点が印象に残った。

- デジタル部分は日本より先行している面が多々ある。
- 本の並べ方、レイアウト等は日本の方が整理整頓は行き届いている。ただし、これは几帳面で繊細な日本の国民性によるものではないかと思う。
- 公共図書館・大学図書館とも図書館業務の中心は正規職員の司書であるが、公共図書館では土日にボランティアスタッフがフロアに出て、カウンター業務をしているなど、日本と異なる部分もある。日本の場合、ボランティアはフロア業務よりは、読み聞かせなどの児童サービスや朗読サービス、本の修理等を担うケースが多いと思われる。
- 全体的には「本を読む、自習する」といった昔ながらの図書館のタイプが主流である。大学図書館にもラーニングコモンズがあり、滞在型のスペースづくりはしているが、日本ほど注力していない。大学図書館の自習室は本校の学生であれば、ほぼ24時間使えるが、部屋の造り自体は昔の大学図書館の自習室であった。
- 漫画と日本語の資料が訪問したどの図書館にもあった(図36)ことから、日本文化との親和性が高いと思われる。
- 日本のTSUTAYA図書館のような、お洒落な空間を演出して心地よい滞在を利用者に提供する図書館というものもあるが、劇的に増えているという訳でもない。なお、TSUTAYAが参考にしたといわれている誠品書店信義店(旗艦店)を訪れたところ、確かにTSUTAYA書店とよく似て

いた。しかし細かく見ていくと、異なる面も少なくなかった。これについては、後日機会があれば検討してみたい。



図 36 日本の雑誌もある (北投分館)

最後にこのような機会を与えて下さった I-LISS 日本支部メンバー、台湾支部メンバー、会場となった国立台湾師範大学関係者の皆様に改めて感謝を申し上げたい。

(注・引用文献)

- 1) *International Library and Information Science Society* <<http://www.i-liss.org>>
- 2) *2019-ICLIS* <<https://iclis-2019.conf.tw>>
- 3) 「国立臺灣大學」 <<https://www.ntu.edu.tw>>
- 4) 「変貌する台湾大学図書館の空間改造」『第19回 図書館総合展』 <<https://www.libraryfair.jp/forum/2017/5872>>
- 5) *National Taiwan University Library Main Library Floor Layout* <<http://www.lib.ntu.edu.tw/en/node/794>>
- 6) 前掲 4)
- 7) 原田亜美「海を越える図書館 日本から台湾へ、つたわる図書館のノウハウ - 国立臺

- 灣大學 社會科學院 辜振甫先生紀念圖書館」
『PASSION』36. <https://www.kongo-corp.co.jp/passion/PASSION_Vol136_text/taiwandai_koolib.html>
- 8) 八木はるな「台湾大学図書館事情」『世界の図書館から』 <<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/world-library2>>
- 9) 「国立台湾大学図書館」『egamiday-wiki』 <<http://egamiday.sakura.ne.jp/wiki/%E5%9B%BD%E7%AB%8B%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E5%9B%B3%E6%9B%B8%E9%A4%A8>>
- 10) 「国立台湾師範大学」『Wikipedia』 <<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E7%AB%8B%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E5%B8%AB%E7%AF%84%E5%A4%A7%E5%AD%A6>>
- 11) 「國立臺灣師範大學」 <<https://www.ntnu.edu.tw>>
- 12) 酒井貴美子「ただいま増殖中，台湾の知恵図書館」『カレント・アウェアネス-E』226, 2012.11 <<https://current.ndl.go.jp/e1357>>
- 13) 札幌市中央図書館「札幌市の図書館 大通カウンター」 <<https://www.city.sapporo.jp/toshokan/sisetu/odori.html>>
- 14) 内閣府「世界各国の出生率」 <<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/sekai-shusshou.html>>
- 15) 「台北市立図書館」 <<https://japanese.tpml.gov.taipei>>
- 16) 宇佐美喜昭「7. 世界から注目を浴びるエコ建築家」『台湾，地球環境問題への真摯な取り組みと萌える環境ビジネス』日本貿易振興機構海外調査部, 2010, p.19-20 <https://www.jetro.go.jp/ext_images/jfile/report/07000425/taiwan_kankyo_biz_all.pdf>
- 17) 山田育栄「台北市立図書館北投分館」『世界建築巡り』 <<https://architecture-tour.com/world/taiwan/taipei-public-library-beitou-branch/>>
- *WEB は全て 2019 年 12 月 27 日アクセス